

奉仕し、三百石を賜ふ。此の子數子あり。長男清左衛門百四十石相續し、父が遺跡を繼ぐ。二男伊右衛門・三男甚左衛門各八十石宛配分知を賜はり、分家して各、綱紀卿に奉仕し、子孫連綿すとあり。

○折違町
元祿九年の地子町肝煎裁許附に、折違町とあり。此の町名は、橋名より起りて呼びそめたるもの也。

○折違橋
金澤橋梁記に、すぢかい橋とあり。元祿六年の土帳に、すぢかい橋近所六枚町など、記載し、金澤町會所留記に載せたる元祿元年十月捨子届書に、折違橋番人三右衛門とありて、倉月用水に架けたる橋にして、惣構橋に屬せり。其の橋往來折曲り、折違に架けたる故にすぢかい橋と呼べるなり。

○折違燒事略
自他群書に云ふ。延寶五年二月十九日午刻、菊池十六郎與力川嶋覺右衛門三社町宅より出火。角違の後隣奥村勘左衛門宅と二軒燒失。古道町へ火粉飛びて、其の日風烈しく、

折違町・宮腰口へ燒行き、加藤圖書上地町・菊池十六郎下屋敷・曹洞宗放生寺類火。折違町より六枚町へ火分れて、安江木町・柳町・南六枚町・北六枚町・嶋田町・川原兵庫上^下地町・馬廻町・安江木町之後、侍町燒失。玉井勘解由上屋敷・下屋敷不^レ殘。勘解由前侍屋敷、白髭持明院にて燒留る。故に一柳監物殿整居屋敷は無事なり。此の時監物殿は高巖寺へ立退きたり。今日粟崎へ鷹野に出給ひ、供奉の面々多く家燒失と也。玉井勘解由鐵炮の薬に火移り、鳴り渡る事震動の如く、是を折違燒といふ也。とあり。變異記には、延寶四年二月十九日木、新保より出火。折違橋町端まで燒失、家數千三百餘軒とあり。又菅家見聞集及び年譜などにも延寶五年二月十九日とす。變異記に、四年丙辰に係けたるは誤りならんか。尙追考すべし。

○加藤圖書上地町
元祿九年の地子町肝煎裁許附に、折違町・廣岡町・加藤圖書上^下地町と載せたり。自他群書に、延寶五年二月十九日折違燒火災の時、加藤圖書上^下地町・菊池十六郎下屋敷等類燒すとあり。此の地は今山王道より折違橋へ出づる小路の間に

て、圖書町と呼び來りしかど、明治四年戸籍編成の時、折違町へ屬せりと云ふ。

○加藤圖書下邸趾
龜尾記に云ふ。圖書町は昔加藤圖書の下邸也。そのかみ圖書は高知を賜はり、人持組なり。此の頃此の地邊その下邸にて、家士の居宅等ありしといへり。按ずるに、慶長十六年九月下屋敷歩數書に。
三千九百石
一、九反七畝拾五歩
加藤石見守

自餘略之。
右中納言様御誼之並に、歩割書付可遣旨筑前様就御意如此候。以上。
亥九月廿三日
奥村河内守
篠原出羽守
横山山城守

- 淺野將監殿
- 西村右馬助殿
- 河原兵庫殿

石川茂平殿
野村五郎兵衛殿

按ずるに、加藤石見は、元祖宗兵衛重廉の長男、二代圖書里重なり。初め石見と稱し、後圖書と稱せり。萬治二年里重没し、其の子數子ありといへども、長男九郎兵衛先父没し、嫡孫重長承祖、遺知の内貳千石賜はりたり。十二冊定書に載せたる萬治二年十一月の定書に、高知之跡目小身に成候はゞ、下屋敷知行當りの外取上可申と。此の達書あるに依りて、加藤氏下邸も取上に相成り、其の地町地と成り、加藤圖書上^下地町と町名を稱せしもの也。舊藩中諸士下邸を賜はる定は、家祿自分知三千石以上なりしゆゑに、加藤氏の家祿二千石に成りしに依りて、其の地取上に成りたる事知られけり。

○大乘寺舊趾
石川訪古遊記に云ふ。大乘寺故址在野市村云々。天正初柴田勝家燒夷野市。寺廢。藩建國初。聽十四世住持虛室請賜。木新保加藤重廉下邸内地。慶長初。公命收寺地。作外塹。此云。又移居本多房州上邸側云々。と正徳元年に撰ぶ所の松壽林